

知的障害者を対象としたオープン・カレッジの成果と課題

～第1回「はびねす☆EIWAカレッジ」の実践から～

狩 野 晴 子

I はじめに

1 本研究の目的

知的障害のある人たちに対する生涯学習の重要性は、国連・障害者権利条約や我が国の障害者基本計画にも示されている通りであるが、いまだ学習の機会と場が十分に確保されているとは言い難い状況である（菅野他、2010）。その状況を打破したい、地域で暮らす知的障害者が学習を通して豊かな生活を送れるようになってほしい、延いては知的障害者自身が自らの権利を守れるように支援したいとの思いで、筆者は2011年度より静岡英和学院大学におけるオープン・カレッジ（はびねす☆EIWAカレッジ）の開催を企画し、実施してきた。

本研究では、第一に、1年間の歩みを振り返り、実践記録としての報告を行う。第二に、受講生に対して実施した調査をもとに、実践内容についての検証を行う。これらを通して、2011年度に行ったはびねす☆EIWAカレッジの成果と課題について明らかにすることを目的とする。

2 知的障害者を対象としたオープン・カレッジの状況

オープン・カレッジとは、大学の施設や教員・学生ボランティアなど大学資源を活用し、障害者の生涯学習を支援する取り組みのことをいう。1995年、東京学芸大学において、大学教員や付属養護学校（現在は特別支援学校）、多摩地域の養護学校教員の教員などで構成される「養護学校進路指導研究会」が、特別支援学校を卒業した知的障害者を対象に大学公開講座「自分を知り、社会を学ぶ」を開講したのが、その始まりである（松矢、2004）。関西では、1998年には大阪府立大学、桃山学院大学、武庫川女子大学の3つの大学が共通理念のもとオープン・カレッジという名称で開講している。その後、この取り組みは全国的な広がりを見せており、全国13か所で開催されている。なお、知的障害者のためのオープン・カレッジの理念は、知的障害者の人権(教育を受ける権利)の保障、知的障害者の変化(発達)の可能性の保障、地域社会に対する大学の貢献、の3つと言われている（建部、2001）。

II はびねす☆EIWAカレッジの実践

1 概要

はびねす☆EIWAカレッジは、前述のオープン・カレッジの理念に基づき、知的障害のある本人

に学習の機会を提供し、豊かな生活を送れるように支援すること、および、大学のもつ人的・物的資源を地域に提供し社会貢献を行うことを目的に、2011年度より開始された。運営は、コミュニティ福祉学科教員である筆者と、コミュニティ福祉学科の学生有志が中心となって行っており、学生に対する実践教育の場としての役割も果たしている。

学生の参加の参加方法には二つの方法がある。一方は「学生スタッフ」と呼ばれ、一年を通して講座の円滑な実施にむけて、企画段階から運営に関わり中心的な役割を果たしている。なお、学生スタッフが、自らのグループに付けた団体名「はびねす☆」が基となり、静岡英和学院大学におけるオープンカレッジは、「はびねす☆EIWAカレッジ」と名付けられた。

もう一方は「学習サポーター」といい、知的障害のある受講生が、スムーズに受講できるよう物理的、精神的支援を行うスポット的な参加方法である。なお、学生スタッフは、講座当日は、学習サポーターとして受講生を支援する役割も担っている。これらの関わりを通して、学生スタッフは事業のマネジメント方法や社会資源の開発・活用方法を実践的に学び、学習サポーターは障害のある方と接し、支援について学ぶ貴重な機会を得ている。

開講される講座は、東京学芸大学等が実施しているオープン・カレッジ東京の実践に倣い、近年の支援のキーワードである生涯発達支援と地域生活支援に向けた支援領域、生涯学習の領域として次の4つの領域を取り上げることとした。4つの領域とは、①学習・余暇（学ぶ・楽しむ）、②自立生活（くらす）、③作業・就労（はたらく）、④コミュニケーション（かかわる）を指す。これら4つの領域は、ライフステージごとにその支援の割合が変化するのだが、学習・余暇（学ぶ・楽しむ）支援およびコミュニケーション（かかわる）支援は、一生涯を通じて行われる必要があると、その重要性が指摘されている（菅野他、2010）。

はびねす☆EIWAカレッジでは、前述の4つの領域に関する内容を講座としてとりあげ、年4回の講座を実施している。体系的に学びを深めるため、受講生は、原則として第1回から第4回のすべての講座に参加できることを応募の条件とした。また、学習サポーターについても同様の条件を課している。これは、受講生と学習サポーターが相互理解を深めるためには、一回限りの出会いではなく、長期的な関わりが必要であると考えたからである。したがって、1年間は固定されたメンバーで実施されることになる。年度の始まりの講座では開講式を行い歓迎の意を伝え、最終回の講座では閉講式を行い、受講生一人ひとりに講座を終えたことを称し、修了証を渡している。

2 2011年度の実施内容

ここでは、2011年度に実施された、第1回「はびねす☆EIWAカレッジ」および関連イベントについて述べてみたい。

①サポーター養成講座の実施

オープン・カレッジの開講に先立ち、オープン・カレッジについての理解を深め、受講生を支援する学習サポーターを募集・養成する目的で、サポーター養成講座「来て！見て！感じよう！～知的障害者の世界～」を実施した。静岡英和学院大学の学生を中心に、関心のある市民を対象に広く

呼びかけ、大学生や高校生、地域住民の約50名の参加があった。2時間の養成講座では、学生スタッフ（はびねす☆）が中心的に講師役を務め、オープンカレッジの概要、知的障害についての基礎的な知識、知的障害の疑似体験、当事者主体の支援についての説明などを行った。特に疑似体験のコーナーでは、「自分でやりたくても手伝われてしまう気持ち」や「やりたいのにうまくできない気持ち」を体験し、「どのように接すればいいのか少し理解できた」、「どのように支援をすることが適切なのかを考えるきっかけになった」と評価する参加者の声が多く聞かれた。なお、「学習サポーター」希望者は、必ずサポーター養成講座を受講するよう条件づけている。

②第1回「はびねす☆EIWAカレッジ」の実施

年間を通じたテーマを、『暮らしをゆたかに～「からだ」と「こころ」の健康づくり～』とし、講座での学びが受講生の豊かな生活へとつながることを願い、全4回の講座内容を決定した。対象は、静岡県内で暮らす18歳以上の知的障害者であり、かつ4回の講座に連続して参加できる者とした。募集人数は20名としたが、応募者は14名であった。募集人数に達しなかった要因としては、周知が十分になされなかったこと、募集期間が短かったことが考えられる。初の試みであったため、主催者側に対象者のデータが無く、市内の福祉施設・関係機関等を経由して講座の案内を行わざるを得なかった。その結果、対象者に情報が届かない、届いても応募期間に間に合わないという事態を生んだと思われる。

講座は、多くの受講生が参加できるよう平日は避け、大学の授業がない土曜日の午後、原則として午後1時～午後4時に設定した。講義部分は休憩を含めて2時間とし、前後は、学生スタッフからの説明や振り返りの時間（はじめの会、おわりの会と呼んでいる）とした。講座内容の企画や内容に沿った講師への依頼・交渉・調整等には学生スタッフがあたり、開講日の約3ヶ月前から担当講師と打ち合わせを重ね、講座を作り上げていった。講師の選定にあたっては、大学および短期大学部のもつ資源を有効に活用するという観点から、一つの学科に偏ることがないように配慮した。また、地域にある社会資源を開発するという観点から、担当講師は大学教員に限定せず、4回の講座のうち1回は民間の協力者に、講師を依頼するようにした。各回の講座タイトル、講師、参加者数は表1の通りである。

表1 2011年度 第1回「はびねす☆EIWAカレッジ」開講内容

月日	講座タイトルおよび講師	参加者数
7/9	第1回 からだの健康「レッツダンス！」 鍋谷照先生(静岡英和学院大学人間社会学部コミュニティ福祉学科) 協力：E・D・C（静岡英和学院大学ダンスサークル）	59名（受講生11名、学生33名、見学者15名）
9/24	第2回 こころの健康「やる気スイッチをさがそう」 日比優子先生（静岡英和学院大学人間社会学部人間社会学科） 協力：日比ゼミ学生4名	30名（受講生11名、学生14名、見学者5名）
10/29	第3回 余暇と健康「笑顔をかこう！とろう！」 佐藤浩司郎先生（画家）、大野仁史先生（写真家）	30名（受講生11名、学生14名、見学者5名）
11/19	第4回 食と健康「『おいしさ』の秘密～ヒトの味覚と食文化」 木下ゆり先生（静岡英和学院大学短期大学部食物学科） 協力:食物学科学学生3名	30名（受講生8名、学生18名、見学者4名）

③活動報告会の実施

年度の最後に、受講生と共に全4回の講座を振り返り、成果と次年度への課題を共有すること、1年間の活動を広く地域住民に対し広報を行うことを目的に活動報告会を開催した。参加対象者は特に限定せず、広く呼びかけを行ったところ、受講生や学習サポーター、受講生の家族・友人、福祉関係者など31名の参加があった。

報告会では、初めての参加者にも講座の内容がわかるよう、学生スタッフが4回の講座の内容を紹介するプレゼンテーションを行う。受講生は、プレゼンテーションを参考にしながら、まず、どの講座が自分にとって一番良かったかを決める。次に、グループに別れて自分が選んだ講座の何がどのように良かったのかを話しあい、最後にグループで話し合った結論を全員の前で発表する。このような当事者による評価を通して、受講生の生の声を吸い上げ、次年度へと活かす仕組みとなっている。

Ⅲ 調査

1 対象

講座受講生14名を対象に、二つの調査を実施した。受講生の年齢は18歳～44歳、そのうち10～20代が半数以上を占める若い集団であった。障害の程度については、療育手帳による等級の確認を行っていないため、厳密に述べることはできないが、支援を受けることで状況を適切に理解し、自分の意見を述べることができる、2時間～3時間の講座でも休憩を挟めば集中していることができるという点から、比較的軽度の者が参加していたと言えよう。また、就業形態別にみると、一般就労をしている受講生が4名、福祉的就労をしている受講生が10名という構成であった。受講生の男女比は、1：1（男性7名、女性7名）であった。

2 調査方法

受講生には以下の二つの調査に協力をしていただいた。

①講座アンケート

全4回の講座を通して、終了時にアンケートを実施した。アンケートの質問項目は、わかりやすい表現を心がけ、漢字にはルビをふり、視覚的に評価のプラス・マイナスが理解できるようイラストを配置した。

アンケートの例

1、^{5分}楽しく学べましたか？			
とてもおもしろかった	おもしろかった	まあまあ	つまらなかった
			
----- ----- ----- -----			

受講生自身が理解し、回答しやすいよう工夫をしたが、回答にあたっては、質問内容を学習サポーターが口頭で説明をする、自筆での記入が難しい方の場合は代筆をする等、本人以外が回答に関与している現状がある。しかし、知的障害者に対する記入式アンケートではこの種の関与は必要な支援の範囲に含まれると考えられる。また、学習サポーターには事前に本人の意見を十分に尊重することを伝えているため、アンケートに与える影響が全く無いとは言えないが、最小限の影響となるよう配慮と努力を行った。

アンケートの内容は、4回の講座共通の項目と各回の講座ごとに異なる項目の2種類があったが、今回の調査では、共通項目のみを取り上げ比較を行う。対象となるアンケート項目は、「楽しさ」「講座内容に対する興味」「満足度」「講座の進め方」の4つである。

②活動報告会におけるアンケート

参加者全員を対象にアンケートを実施した。アンケートに関する工夫や配慮は、講座アンケートと同様である。今回の調査で分析の対象とする項目は、受講生のみが回答した「講座に参加することで自分自身にどんな変化があったか」の1項目とする。

3 倫理的配慮

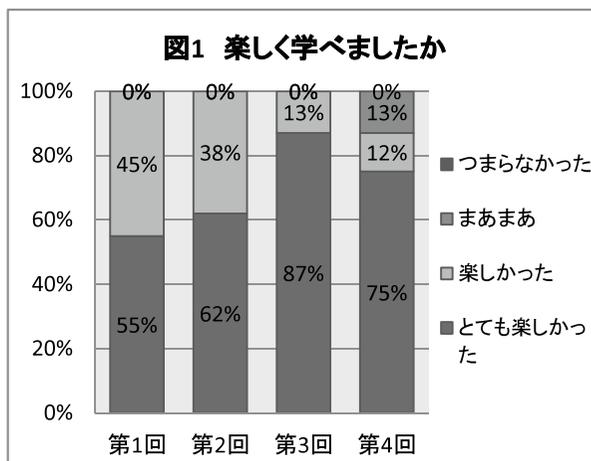
アンケートは無記名によるものとし、回答は自由意志によるものであること、個人情報保護の配慮について口頭で説明をおこなった。

IV 調査結果および考察

1 楽しく学ぶことができたか

知的障害者の多くは、学校生活の中で勉強ができないことで引け目を感じたり、いじめを受けた経験をしたりしているため、学習に対してマイナスのイメージを抱きがちである。しかし、知的好奇心が刺激されること、新しい世界を知ることの喜びは共通してあるはずである。菅野の研究によれば、知的障害者の知的機能は、学童期や青年期をピークに低下の一途をたどるものではなく、50歳代であっても維持、向上し続けていることが明らかにされている（菅野、2009）。はびねす☆EIWAカレッジでは、学習に対するマイナスなイメージを払拭し、楽しく学ぶということを大切にしている。そのため、講座では、視覚的な資料を用いる、クイズ形式を取り入れ受講生の興味を引く、グループでの討論や、個人の発表を取り入れる等、展開方法を工夫している。

受講生のアンケート結果は、図1の通

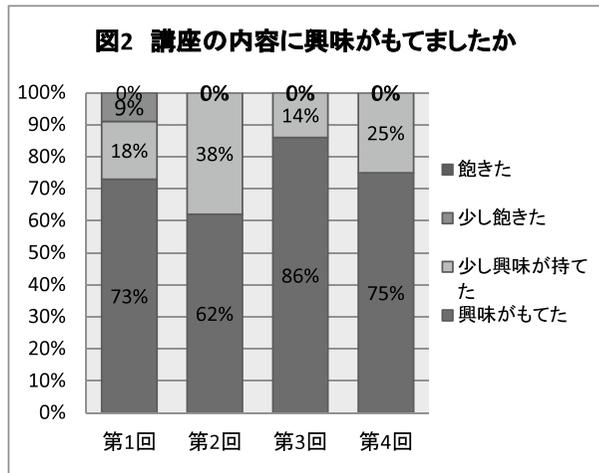


りである。4回すべての講座で、楽しかった、とても楽しかったとの回答が大半を占めていた。なぜ楽しく感じたのかはより詳しい調査と内容の検討が必要だが、当初狙いとしていた、楽しく学ぶという目的は達成できたと考えられるだろう。

とても楽しかったと答えた割合が最も高かった第3回は、絵と写真のワークショップを実施した回である。題材が絵や写真であり受講生が自由に表現できる内容であったこと、「笑顔を描く」「笑顔の写真を撮る」というテーマであったため作業を通して、参加者同士に会話や笑顔が生まれ活発な交流ができたこと、ポラロイドカメラや絵の具など道具の持つ面白さ、道具を使うことの楽しさが評価に反映したのではないだろうか。活動報告会における当事者評価でも同様の意見が出されていた。

2 講座の内容に対する興味

楽しく学べたことと、学習内容に対する興味の高さ、満足度は必ずしも一致しないとの考えから、項目を分けてそれぞれについて尋ねている。図2に示した通り、どの講座に対しても、興味・関心は概ね高いが、特に第3回の講座が高い評価を得た。次に高かったものは第4回であり、この二つについては、学習の楽しさの連動が見られた。第3回は、ポラロイドカメラを初めて使ったという受講生

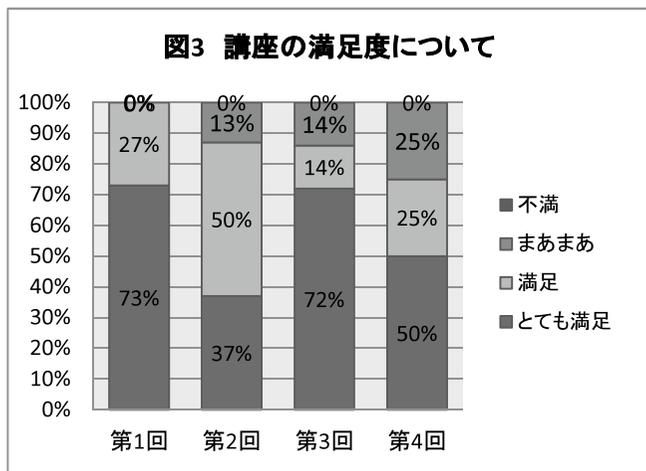


が多く、新しい物への興味や人とのコミュニケーションが、興味を引き出したのではないだろうか。また、第4回では、「食」という、もともと興味関心の高いテーマを扱っていたことに加え、目隠しをしてグミを食べ味を当てるゲームや、様々なだし汁を試飲した上で出汁の種類を推測するなど、試食・実験といった要素が強かったことが、受講生の興味を引いていたと思われる。

各講座の内容は、受講生の興味・関心を持てる内容を取り上げるように心がけ、4回分の講座内容を決定したが、その選択・決定が受講生に受け入れられ、興味に合致したものであったことがうかがえる結果となった。

3 講座に対する満足度

満足度に関する項目では、第1回の評価が最も高く、受講生全員が満足、またはとても満足と回答してお



り、不満と感じているものはいなかった。第1回の講座は、全4回の講座の中でアイスブレイクの意味を持つ。そのため、緊張をほぐし仲間作りを促進する内容であるダンスを取り上げた。体を動かし、グループ毎にダンスを練習することで一体感や達成感を感じることができ、それが高い満足度へとつながったのではないだろうか。また、受講生の感想から、在学生のダンスサークルによる模範演技およびダンスの指導が良かったと述べられていた。多くの学生が関わり、華やかな雰囲気の中で講座が行われたことも満足度を高めた一因であろう。

第4回は、講座内容に対する興味の数値は高かったが、満足度としてみると75%が満足またはとても満足と答えているが、4回の講座の中では最も満足度が低かった。これは、体験・実験のメニューを多く用意したことが興味を喚起した反面、限られた時間の中では十分に消化することができず、複雑さを生んでしまったことが影響しているのではないだろうか。特に、7種類のだし汁を比較する実験では、種類が多かったため、回答を導き出すことが困難であった。種類を絞り、問題をシンプルにする等の改善が必要である

4 講座の進め方について

講座の進め方、速さについて尋ねた項目では、ちょうどよかったと答えた回が多かったが、第1回、第3回は速かったと感じた人も目立つ。これは、実際に講座の進行スピードが速かったという意味と、もっとじっくりと楽しみたいという意味の二通りが考えられる。第1回は時間が足りなくなる場面があったため、前者の意味が強いと思われる。しかし、

第3回はゆったりとした時間配分で実施したにもかかわらず、43%の受講生が速かったと答えており、後者の意味合いが強いのではないだろうか。

第2回は心理学に関する講座であり、講義とグループワークを取り入れ、身近な話題を取り上げるなど理解しやすいように展開を工夫したが、4回の講座の中では最も大学の講義に近い内容のものであった。そのため、「難しい」「速い」と感じる受講生が多いのではないかと予測していたが、結果は、予想を裏切り「ちょうどよかった」と答えた割合が最も高かった。これは、多少難しいと思える内容であっても、展開を工夫しゆっくりと適切なスピードで進めることで、興味を持って取り組めることを示している。受講生からは、「やる気が出る方法を学べた」「生活が楽しくなる方法を学べて良かった」といった感想が寄せられた。感想からも、受講生が講座の内容を適切に理解していることがうかがえた。

5 講座と受講生の変化について

活動報告会で実施したアンケートでは、「講座に参加することで、自分にどのような変化がありましたか」という設問を設け、受講生に回答してもらった。結果は、図5の通りである。

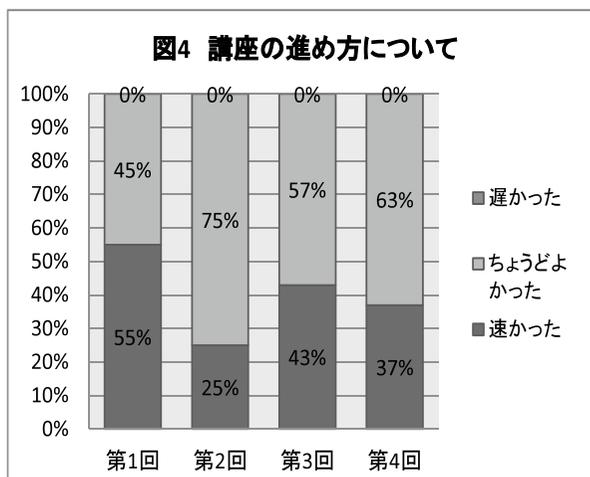
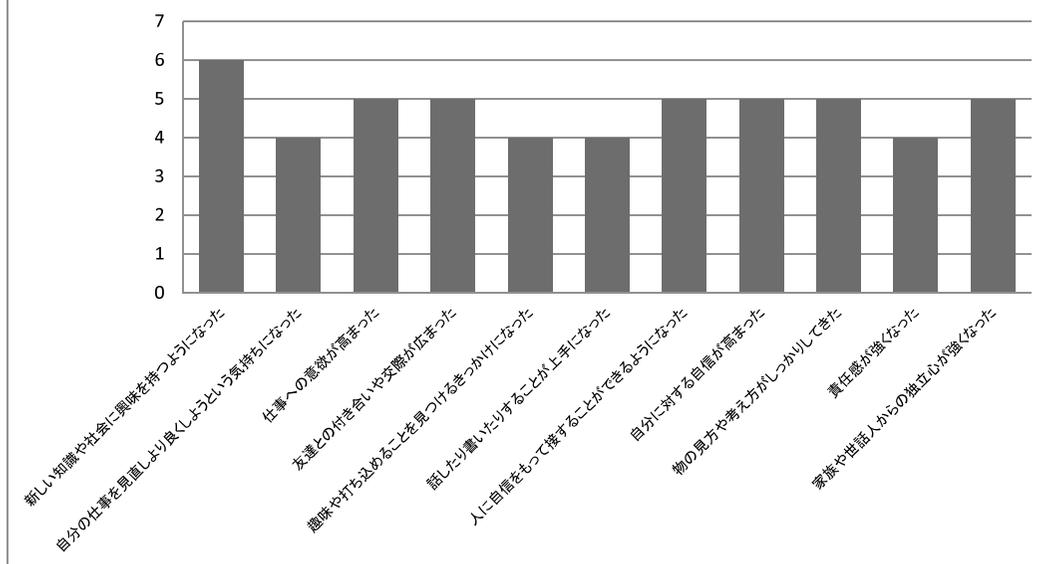


図5 講座に参加することで、自分にどのような変化がありましたか
(回答者8名、複数回答可)



すべての項目について、変化があったと答えた人が半数以上を占めており、講座を通して参加者に好ましい変化が訪れたことがわかる。特に、「新しい知識や社会に興味を持つようになった」という項目では、最も多くの人々が「変化があった」と答えており、講座が社会との接点を見出したり、まだ知らない世界に対し一歩踏み出す機会を提供する場となっていることがうかがえる。その他、「仕事への意識が高まった」「友達との付き合いや交際が広まった」「人に自信をもって接することができるようになった」「自分に対する自信が高まった」「物の見方がしっかりしてきた」「家族や世話人からの独立心が強くなった」といった項目でも、変化があったと答えた人が5名おり、①学習・余暇（学ぶ・楽しむ）、②自立生活（くらす）、③作業・就労（はたらく）、④コミュニケーション（かかわる）の4つの領域、それぞれにおいて有効な学びがあったと言える。中でも、「自分に対する自信が高まった」という項目は、セルフ・エスティームの形成に関連する内容であり、セルフ・エスティームの形成はエンパワメントの根底を成すものである。この結果は、知的障害者のエンパワメントにおいて、今後、重要な役割を「はびねす☆EIWAカレッジ」が果たす可能性を秘めていることを示唆している。

V おわりに

大学、学科の理解と協力の下、「はびねす☆EIWAカレッジ」は無事1年目の講座を終えることができた。この1年間に得たものは、非常に多く貴重なものであったが、そのうちの三つについて述べたい。まず、第一にオープン・カレッジの理念でもある知的障害者の人権の保障、発達保障に貢献できたことである。このように表現すると大仰であるが、講座に参加する受講生の生き生きとし

た様子や笑顔、1年間を通して感じる変化、家族から寄せられる声、そういったものが、講座に関わる者の動機を高め、喜びと達成感をもたらしてくれた。次に、大学内外の横の繋がりが生まれたことである。講座の開催という共通の目的に向かって、学内外の様々な機関が関わり取り組むことで、連携が強化されると共に、関係者の知的障害者に対する理解が深まっていった。学生スタッフや学習サポーターが、街中で受講生に出会って声をかけるという場面も生まれ、地域で共に暮らすという実践が始まったことを実感している。最後に、学生の成長を目の当たりにできたことである。慣れない運営の仕事に戸惑いながらも講座の実現に向けて、どの学生も非常に熱心に直向きに取り組んでいた。一人ひとりが役割と責任を持って活動にあたり、その中で、知的障害者のニーズを実感したり、架け橋となる仕事の魅力を発見したり、連携の必要性を感じたり、それぞれの学びと成長を遂げていった。そのような学生の成長の場に立ち会えたこと、共に活動に取り組めたことは筆者にとって大きな喜びであった。また、オープン・カレッジの理念からすれば、あくまで副次的な位置づけにならざるを得ないが、「はびねす☆EIWAカレッジ」がソーシャルワーカー養成に効果的な実践の場であることを実感した。

1年間の活動を終える際、受講生、受講生の家族、学生から「はびねす☆EIWAカレッジ」の次年度以降の開催を切望する声が多く寄せられた。継続的な開催ができるよう、財源、担い手の確保が今後の課題である。

謝辞

「はびねす☆EIWAカレッジ」の開催にあたりご協力いただいた全ての方、および調査にご協力くださった受講生の方々に感謝申し上げます。

文献

菅野敦 (2009) 「ダウン症候群の知的機能の生涯発達変化」『障害者問題研究』

菅野敦他、オープン・カレッジ東京運営委員会編 (2010) 『講座づくりの実践マニュアル知的障害者の障害学習支援～いっしょに学び、ともに生きる～』東京都社会福祉協議会

建部久美子編 (2001) 『知的障害者と生涯教育の保障－オープン・カレッジの成立と展開』明石書店

津田英二 (2006) 『知的障害のある成人の学習支援論－成人学習論と障害学の出会い』学文社

松左勝宏監修／養護学校進路指導研究会編 (2004) 『大学で学ぶ知的障害者－大学公開講座の試み』星雲社

